日本経済新聞 NIKKEI 電子版
2025年（令和7年） 6月9日 月

光学機器のオプトル、30年に売上高倍増へ　ステレオカメラなど軸に

2025年6月9日 5:00 (2025年6月9日 13:25 更新) [会員限定記事]

フォークリフト上部後方に設置されたオプトルの産業用ステレオカメラ

岩手県花巻市に本店を置く光学機器のオプトル（本社・横浜市）は2030年の売上高を現在の2倍の350億円に引き上げる計画をまとめた。得意とするカメラやレンズの技術を生かし、車載など成長分野に製品を投入する。ものづくりに加え、製品から収集したデータを生かしてソリューションビジネスを展開するシナリオも描く。

現在の経営の柱はセンシング（測定技術）とプロジェクション（投映）の2事業だ。

センシング事業ではステレオカメラが主軸製品。人の目のように2つのカメラを左右に配置し、対象までの距離を計測する。自動車の前方の3次元（3D）空間を認識し距離画像を取得する先進運転支援システム（ADAS）の重要部品となっている。

2つのカメラの間隔が広いほど計測精度は増すため、小型化には技術力が要る。同社は間隔が8センチメートルと「世界最小サイズ」（竹本浩志社長）の製品をデンソーと共同開発した。軽自動車や小型車への搭載が可能となった。

産業分野でも実装が進む。豊田自動織機と共同開発したステレオカメラは、フォークリフト後方に設置することで人や障害物を検知・認識する。距離データと組み合わせてブレーキ制御などに生かし、フォークリフトを操作する際の安全性を向上させる。

オプトルのステレオカメラがフォークリフトの上部後方に設置されている

クレーンの腕の先端に取り付けたステレオカメラは作業員や荷物との距離情報を検知する。人工知能（AI）認識と結びつけて作業現場の安全確保を補う。全国で導入実績があり、24年度の「TOHOKU DX大賞」（東北経済産業局主催）の最優秀賞を受賞した。

もう一つの柱であるプロジェクション事業でも車載分野の伸びしろを見込む。同社は投射レンズやミラーを組み合わせ、狭いスペース内でも大画面に画像を映し出せる技術を持つ。

この技術で自動車のフロントガラスに速度などの情報を投映できる。ダッシュボードの計器類を確認する場合に比べて運転手の視線移動が少なくなるため、安全運転に有効という。日本精機と共同開発したディスプレー投映技術は欧州の高級車に搭載されている。

車のフロントガラスに速度などの情報を投映＝日本精機提供

大型スクリーンに動画を投映するレーザーテレビ用の技術も開発した。中国家電大手の海信集団（ハイセンス）と共同開発したレーザーテレビはレーザー光源で4Kや8Kの映像を映せる。

100インチを超えるような大型テレビは液晶やプラズマディスプレーではエレベーターでの搬入が難しい。このためレーザーテレビの需要は中国でマンションに暮らす消費者の間で増えているという。

同社の技術を使ったプロジェクターは近年、学校の教室や企業の提案説明の場面での利用が拡大した。成長の見込める市場に技術を投入していく。

既存技術を伸ばすのと並行して同社製品から得るデータを生かす方策を探る。28年以降をビジネスモデル転換期と位置づけ、顧客の課題解決型の事業を複数立ち上げる計画だ。

2事業の主力製品・応用例

	センシング事業	プロジェクション事業
車載	ステレオカメラ	フロントガラスへの情報表示
その他	ステレオカメラとフォークリフト、クレーン	レーザーテレビ

オプトルはリコーのカメラ生産子会社、リコー光学として1973年に花巻市で発足した企業が源流。リコーグループの事業再編で2014年にリコーインダストリアルソリューションズに改組された。

その後のカーブアウト（事業切り離し）の結果、リコーと資本関係がなくなり、24年に現社名に変更した。ここ数年は年商200億円弱で推移している。花巻事業所は3棟の工場を持ち、500人弱が働く。横浜本社に約100人の社員を抱えるほか、香港とドイツに支店を構える。

（朴相五）

許諾番号30104300　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。　©日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。
日本経済新聞社は、記事内容により、特定の企業・団体や商品・サービスの購入・投資等を推奨するものではありません。